

松本清張記念館

◆館報◆
2008.1
第26号

目次

- 開館九周年記念講演会 2
- 筒井康隆講演会 6
- 企画展紹介 6
- 「松本清張と松川事件」 6

6 2 6

- 清張原風景「点描」 6
- 展示品紹介 6
- 友の会活動報告 6
- トピックス 6

8 7 7 6

現在入手できる本
『松本清張全集』第17巻(文藝春秋)
『象徴の設計』文春文庫(文藝春秋)



『象徴の設計』
昭和51(1976)年11月刊行 文藝春秋

「象徴の設計」は、昭和37年3月から
翌38年6月まで、「文芸」に連載された。

山県が一番怖れたのは、軍隊の中に自由民権運動が浸透することで、兵制が破綻し軍隊自体が内部崩壊することであった。それを防ぐには、早急に兵士の頂上に立つ精神的な「象徴」を作らねばと考える。フランスではそれは「神」であった。日本においては——天皇を軍隊の直接上官の形にしその最極限に置き、その人格を神にまで高めればどうか。山県は眼から鱗が落ちたような心地がした。

明治十五年一月四日、「軍人訓誡」の弱点を更新して絶対制秩序の形成を目指した「軍人勅諭」が下された。天皇に対する忠義という一点に向かって、あらゆる徳目が集中されていた。《上官の命を承ること実は直に朕(天皇)が命を承る義なりと心得よ》命令の絶対性から絶対服従が強調される。《朕は汝等軍人の大元帥なるそされば朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき》天皇が自ら軍隊の元首となることで、軍隊は天皇に直結し、天皇は軍隊を私兵的に直接指揮する。統帥権の発生である。

天皇は「大元帥」という超越的「象徴」として神格化された。山県有朋はこの「象徴」を要に据え、日本軍隊、ひいては明治国家を設計し構築していくた。

(学芸担当 中川 里志)

作品紹介

明治十一年八月二十三日、給料の減額と西南戦争の恩賞遅延を不満として、近衛砲兵が暴動を起こした。世に「竹橋騒動」である。

暴動は一夜にして治まったが、陸軍卿山県有朋はこの事件で軍隊の欠点を痛感する。外形は出来たが、内部の精神が固まつておらず。そこで、忠実、勇敢、服従を軍人精神の三大要素とし、軍秩の厳守を説き、軍人が政治に関わることを厳禁した「軍人訓誡」を急速颁布する。しかし、兵卒の、天皇への忠義心は未だ薄く、彼らにどのようないい精神的支柱を与えるか、山県は見当がつかずいた。

山県が一番怖れたのは、軍隊の中に自由民権運動が浸透することで、兵制が破綻し軍隊自体が内部崩壊することであった。それを防ぐには、早急に兵士の頂上に立つ精神的な「象徴」を作らねばと考える。フランスではそれは「神」であった。日本においては——天皇を軍隊の直接上官の形にしその最極限に置き、その人格を神にまで高めればどうか。山県は眼から鱗が落ちたような心地がした。

明治十五年一月四日、「軍人訓誡」の弱点を更新して絶対制秩序の形成を目指した「軍人勅諭」が下された。天皇に対する忠義という一点に向かって、あらゆる徳目が集中されていた。《上官の命を承ること実は直に朕(天皇)が命を承る義なりと心得よ》命令の絶対性から絶対服従が強調される。《朕は汝等軍人の大元帥なるそされば朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき》天皇が自ら軍隊の元首となることで、軍隊は天皇に直結し、天皇は軍隊を私兵的に直接指揮する。統帥権の発生である。

天皇は「大元帥」という超越的「象徴」として神格化された。山県有朋はこの「象徴」を要に据え、日本軍隊、ひいては明治国家を設計し構築していくた。



筒井 康隆 「小説とは何か」

開館9周年記念として、今年は作家の筒井康隆さんにご講演をお願いしました。
「文学部唯野教授」を受けた、まだ他で発表されていない濃い内容のお話でした。
前日の台風にも関わらず、会場は全国から集まった沢山の聴衆で埋まり、熱心に耳を傾け、メモを取る姿も見受けられました。

今回はその内容を、誌面を拡大してお伝えします。

になつたんだろうと思います。
私は先生の小説を沢山読んでいて親しみがあつたもので、初対面にも関わらず、対談の間中「清張さん清張さん」と言つたのですけど、後で本を見ますと全部「松本さん」に変わつてゐるんですね。それで初めて気が付いて、これは失礼なことをした、年長の方に「清張さん」なんて。それからは「松本先生」と言うようになりますけれども、

その記念館にお招き頂きましたのも、何か清張さんが私のことを気にかけていらっしゃつたからではないかと思います。



以前書いた「文学部唯野教授」という長編があるのですが、これは過去から現在にかけての文学理論を順番に学生に講義していく話でした。その一番最後の講義で、唯野先生自身の文學論はどんなものですかと聞かれて、「虚構理論です」と返事しているんですね。それから虚構理論について書いたことはありません。虚構理論とは勿論私の考えたことで、「読者の側から小説に対して感情移入した感情移入論による文学史」です。

このテーマでお話しするのは今日が初めてです。やこしくて難しいかもしませんがおつきあいをお願いします。

ここで注目しておきたいのは、近代小説の発生当時から、作家とはほとんどが先

1 自然主義的リアリズム

皆さんご存知だと思いますが、自然主義的リアリズムというのがありました。海

外文学、特にロシア文学といった古典を読んでいますと、延々何ページにも亘つて風景描写が続く。さらに人物の性格描写、心理描写。ストーリーを追つて読むのを阻害するではないかと二、三ページ飛ば

したという方もおられるかと

思います。ところが、当時は当たり前のことだったらしいんです。あり

のままの現実、風景だけではなく、当時の社会、大衆、大都会といっ

たものも詳細に描写していま

すから、描かれた世界や現実に対しても、容易に感情移入をすることができました。

また、これらの作家が先人から学んだ樂の主な部分で、大衆は小説を通して世界を知ろうとしていた。描かれている描写の一つ一つが慣れ親しんだもの

ことで、読者の側から小説に対して感情移入した感情移入論による文学史です。

いかは文章として発表したいと思っており、このテーマでお話しするのは今日が初めてです。やこしくて難しいかもしませんがおつきあいをお願いします。

○ 清張との思い出

松本清張先生とは一度だけ対談したことがあります。松本先生からのご指名で、お相手をさせて頂きました。ちょうど直木賞の候補に何度もなつて落ちて、その選考委員の一人が松本先生だったものだから、忸怩たる思いがおありになつたんだろうと思いますけれど。その席で「筒

井君の小説は何かごちやごちやすぎていいのか」とおっしゃつたんですね。私もまだ若かつたものですから生意気に「でも現実がごちやごちやしているから」なんて言い返しています。松本先生は割とアンテナの高くて鋭い方でして、新人が新しいことをやりはじめるときつと何かお感じになることがあって。それで私をご指名

行作家の作品を〈準拠枠〉にしていたということです。準拠枠とは、ヴォルフ・ガング・イーザーという人が言い始めたことなんですが、小説がその時代の読者と出会うための共通の知識とか習慣です。それまでの歴史、普通常識として持つているような社会・政治・科学などの思想も、作家の持つ全ての知識も含まれています。

さて、日本に輸入された自然主義リアリズムとは、今までお話ししたものとちょっと違つて、フランスで提唱された文学理論です。特にゾラが実験小説として定義を否定し、遺伝や社会環境といつた因果律の中に置かれた人間を描き、それによって人間の本質を見出そうとした。ダーウィンの進化論や医学の知識、そういった科学的根拠のもとに主人公の行動を客観的に把握しようとした。

さきの自然主義リアリズムのようには感情移入がしにくく、最初は全く売れなかつたのですが、多くの人が小説に客観的な根拠を求める風潮になり、次第にフランスでは科学的に納得できる自然主義小説が売れ初め、日本の作家はこの影響を受けました。

まず坪内逍遙が「小説神髄」で〈小説はまず人情を描くべきであり、社会風俗の描写はこれに次ぐ〉と、心理的な写実主義宣言をし、日本の近代文学誕生に貢献したんすけど、一方自然主義リアリズムから離れて矮小化されてしまった。また、小杉天外は独自の〈写実主義文学論〉を展開しました。現実を写真のように忠実に書き写すことだけが文学であるといふんですから、文学は作者の創造する余地が全くなく、非創造的になつてしまいます。



その後日本で自然主義文学の理論的支柱になつたのは田山花袋の評論の「露骨なる描写」、そして「蒲団」という小説ですね。この作品によつて悲しいかな日がまつてしまふんですね。本來の自然主義、まして自然主義リアリズムとはとても言えないようになるほどだしか

に人物描写とか風景描写とかちよこちよこと

2 社会主義リアリズム

ロシアでプロレタリア主義の芸術が出てきた時に、〈芸術を通して社会主義の発展のために多くの大衆を鼓舞しなければならない〉と提唱されました。これが演劇と共に文学として日本に入つくると、日本でも資本主義の発展というのにはありましたから、これをきちんと認識し、社会全體を描こうという運動になりました。島崎藤村の「夜明け前」や徳田秋声の「縮団」という傑作があります。この時代のプロレタリア文学を推進させようとしていた評論家の藏原惟人は、「本来の自然主義リアリズムを發展させたうえで、社会に目を向けた作品が待たれるべきだ」と

出でくるんだけど、眼目は尽きてる。社会環境も科学的な構造分析もないわけです。これはもう仕方ないんです、日本のそれまでの伝統的な文学は和歌・俳句・川柳。ほんの一部を描写するだけで全体を想像させるのが良いのだと、読む者の美的感覚を刺激しさえすればそれでいいんだという、省略の美学が日本的作品にこそ私たちは感情移入がたやすくできたわけです。いろいろ想像する楽しみも、これも一種の感情移入である

献したんですけど、一方自然主義リアリズムから離れて矮小化されてしまった。また、小杉天外は独自の〈写実主義文学論〉を展開しました。現実を写真のように忠実に書き写すことだけが文学であるといふんですから、文学は作者の創造する余地が全くなく、非創造的になつてしまいます。

その後日本で自然主義文学の理論的支柱になつたのは田山花袋の評論の「露骨なる描写」、そして「蒲団」という小説ですね。この作品によつて悲しいかな日がまつてしまふんですね。本來の自然主義、まして自然主義リアリズムとはとても言えないようになるほどだしか

に人物描写とか風景描写とかちよこちよこと

うと私は解釈しています。

とにかく「蒲団」が当時の文壇や読者に与えた影響は大きくて、〈自然主義〉は身近な現実をあからさまにできるだけ醜く描写するもの〉ということにされて、ゾラのような社会性・実験性は遠いものになってしまった。しかもこの時代の小説は、ロシアやヨーロッパの大作家のようにになってしまった。しかかもこの時代の小説は有名人でもなければ裕福でもない。そんな作家の身の回りの日常茶飯事や体験を描いた私小説的リアリズムに、一般的の多数読者は容易に感情移入できたわけです。

この時代に培われて浸透した〈小説とは事実そのままを書くのが理想である〉という認識は、私小説そのものも含めた現代の主流文学とか、マスコミ的な文学觀に根強く残っています。

大正デモクラシーの頃に労働体験を持つ作家が現れ始め、また、青野季吉が提唱した「調べた『芸術』」に創作意欲を湧かせた作家が現れます。こうした先輩達から教わった小林多喜二・徳永直の登場で知的階級から労働者階級に至る多くの読者を得て、プロレタリア文学は最盛期を迎えます。それから宮本百合子が現れ、天才少女とうたわれて、徐々に一般社会に浸透していきます。

しかしプロレタリア文学の雑誌ができ、代筆をやらせるようになり、人物や図式的な人間関係が描かれ、マンネリになつてきただんですね。やがて高度経済成長の時代がやってきて、段々と衰退していきます。

3 私小説的リアリズム

柄谷行人が「日本近代文学の起源」で第一章「風景の発見」、第二章「内面の発見」としていまますけれども、これは先ほどの自然主義文学と私小説にあてはめてよいのではないかと思います。特に「内面の発見」とは「わたくしの発見」です。田山花袋の「蒲団」は、性を露悪的に描き出

7 テレビドラマ的リアリズム

だいたいもうおわかりになると思いま
すが、ここで言うのはトレンディードラマのこ
とです。今日的な風習や職業や風俗や言
葉を織りませることでリアリティを出し
て視聴者を感じ移入させ、現代を表現し
ようとするのだけど、こうしたテレビドラ
マを準拠枠にした小説が割と沢山書かれ
ました。一九八〇年代からポップ文学と
いうのが盛んになりましたが、これもテレ
ビドラマ的リアリズムというと文句が出そ
うですけれども。

一九七九年にリオタールという人が「ボ
ストモダンの条件」という本で「物語は終
わった」と書いています。彼の言う「物語」
とは「共産主義という物語」「資本主義
という物語」つまり近代的的理念のことで、
それを我々は「大きな物語」と解釈して
います。大きな物語が終わつた後に来る
のがポストモダン。つまり、ポストモダンの
文学とテレビドラマ的リアリズムとは、も
うなくなつてしまつた大きな物語から離
れて、それぞれの小さな物語に向かうと
いう点で、漫画やアニメのファンと読者が
重なり合つてゐるわけです。

8 資本主義リアリズム

初めて言うんですけど、実際こういう
ものはありません。一九八〇年代から新
書版ノベルズというのが大量に生産され
始めました。今はブームは終わりました
けど、テレビドラマ的と言わざるを得ない
軽さを持った作品です。なぜ沢山出すの

かというと、各大手出版社が書店の棚を

確保するためです。そしてその人気作家
は月に何冊も書きとばすわけですね。内

容的には拡小再生産とか言いようがな
いもので、ページの下部分は真っ白、上半分
で会話だけで情景描写も心理描写も物
語の進展もやつてしまつていて。

ブーアステインという人が、「消費社会
における消費者の心理は、同じような商
品が山のように積み上げてある中から
つだけ取つて買うのでなければ消費した
気持ちにならない」と言っています。同じ
ことがこの新書版ノベルズにもあつたので
はないかと思います。ですから皮肉を込
めての命名であるとお考え下さい。

ただこれらの作品の中には、後のライト
ノベルに発展していく作品も多く含まれ
ております。その意味では過渡的価値はあつた
のではないかと思います。

9 アニメ的リアリズム

この時代に入つて、キャラクターの自立
ということがあります。アニメの場合には、
古典的な時代からキャラクターは自立し
ていたんです。たとえばミックキーマウスは、
時には魔法使いの弟子になります。ベティ・
ブープというかわいこちやんがいますが、
漫画の中では女優ということ設定なんですね。

ベティ・ブープ自身が自立していくいろんな
役をやるということ、これがキャラクタ
ーの自立ということにはなりません。マ
リリン・モンローのようでもあり、当時か
らセックス・シンボルでした。今の「萌え」の

はしりだったと思います。「萌え」とか「お
たく」というのが次第にライトノベルの方

に流れていくわけです。もつと新しい漫画
で萌えやおたくになる人は沢山いるでし
ょうし、商品化も沢山されていると思い
ます。私も七瀬シリーズや富豪刑事シリ
ーズでは、キャラクターがメインでストーリ
ーは二の次のように見える話も書いてい
ます。

そういうおたくとか、あるいは萌えと
いつたものは、ポストモダンと深く関わつて
いるんです。漫画とかアニメの支持者であ
るおたくを読者としているライトノベルは、
一九九〇年代以降からも爆発的に読者
を増加させてきました。ライトノベルと
は物語というよりはキャラクターの媒体
です。キャラクターを立てることによって
商品化されたり、二次使用のマーケットが
広がっていくわけです。

さて、あと残すところはゲーム的リアリ
ズムだけになりました。これについて私が
触発されたのは講談社現代新書の東浩
紀君の「ゲーム的リアリズムの誕生」とい
う書です。たとえばミックキーマウスは、
いずれ必ず書くというこ
とを皆さんにお約束して、
私の講演を終わらせて頂
きます。サンキュー。



■プロフィール

昭和9年、大阪市に生まれる。処女作
品集『東海道戦争』刊行後、「時をか
ける少女」「大いなる助走」などを発表
し、注目を集め。泉鏡花文学賞、谷
崎潤一郎賞、川端康成文学賞を受賞
するも、平成5年から8年までマスコミの
用語自主規制に抗議して断筆。平成
14年には紫綬褒章を受章。近作に『巨
船ベラス・レトラス』『ダンシング・ヴァ
ニティ』。

う本です。この部分をお知りになりたけ
れば、この本をお買いになつて下さい。

では私自身がライトノベルを書いたらど
ういうものができるかということに、いろ
んな人が興味を持つて、書けということを
言つてくる人もおられます。「ライトノベル
︰」なんて思つていると、ライトノベルを書
けという話が三つも四つも来了。不思議な
ことだと思います。『オール讀物』とい
う雑誌に書きたいけれども、
私の名前では読者は付いてこないだろう
から、誰かかわいこちゃんの名前にしてく
れつて言つたら「それはちょっと。やっぱり
筒井康隆じゃない」となんて言つてますね。
折角今まで常常として文壇に地歩を築き
上げてきたのに、今更ライトノベルで失墜
させたくないのですが、どうしようかと考えて
いるところなんですね。





初公開 清張原稿「広津氏と松川裁判」

「松川事件」は昭和24年に福島県松川で発生した列車転覆事件です。

被疑者20名が逮捕され、一審では全員に有罪判決が下りますが、昭和38年に全員無罪が確定し、戦後最大の冤罪事件として知られています。

この事件では被告の救援と公正な裁判を求める運動が、裁判史上例をみない全国的な広がりをみせました。この松川運動の核のひとつは、作家・廣津和郎による丹念な裁判批判です。廣津は「文士裁判」と批判を受けながらも丹念に

平成19年度後期特別企画展 松本清張と 松川事件

平成20年1月19日(土)—3月31日(月)
松本清張記念館[企画展示室]

事件を検証し、世論に訴えました。その活動に多数の文化人が賛同ましたが、清張もそのひとりでした。

清張は「推理・松川事件」の執筆をはじめとし、松川に関心を持ち続け、積極的に運動を支援しました。流行作家として複数の連載小説をかかえながらも、合間を縫って全国各地に演説に向かい、また松川事件についての文章も多数執筆しています。

今回の企画展では、福島大学松川資料室のご協力を頂き、松川事件と廣津和郎そして清張の関わりについて紹介します。



生徒が木板を削ってつくった校歌

場になると足立山の上のオリオン星座をよく眺めていたようだ。
「オリオン星座は私の過去の生活や感情に結びついている。印刷所の夜業をすませて家に帰る

学校(現・北九州市立足立中学校)校歌には「わが学舎に床しく因む」、足立の山よ、朝に夕に仰ぐ山谷ころころかく磨かん」と書かれており、雄大な足立山の存在感とその姿に対する清張の思い、そして青年へ向けた大きな期待を感じ取ることができる。

松本清張が作詞した小倉市立足立中学校(現・北九州市立足立中学校)校歌には「わが学舎に床しく因む」、足立の山よ、朝に夕に仰ぐ山谷ころころかく磨かん」と書かれており、雄大な足立山の存在感とその姿に対する清張の思い、そして青年へ向けた大きな期待を感じ取ることができる。

五九八メートルの山である。足立山の由来は、七六九年弓削道鏡らの陰謀から足の筋を切られた和氣清麻呂が流罪となつて大隅国に流される途中、山麓に立ち寄り湯川の靈泉を浴びるとたちどころに傷が完治し、足が立つことからである。足立山麓には、「或る『小倉日記』伝」に登場する寺で、寛文五年(一六六五年)小倉小笠原の初代藩主小笠原忠真が創建した黄檗宗の古刹・広寿山福聚寺(県指定史跡文化財)がある。

清張原風景
点描

足立山
あだち
やま



（碇政幸）
勇気付けたので
はなかろうか。
清張が上京した
後もオリオン座
をみると、足立山
の風景がきっと
脳裏に蘇っていた
ことだろう。

のほうが多い」(「半生の記」)
と、足立山の上にこの星が貼りついて
いる。その高さの具合で、現在の時間が分
けた。新聞社に入つてからも、毎冬にこの星
を見て家に帰つた。(中略)どこから眺める
にしても、この星を見上げる私は、絶望、
悲哀、孤独といった感情に陥つているとき
輝きを放つ星座をみると、自分を

展示品紹介

絵の道具一式

館内に展示されている使いかけの画材は、べんてる株式会社製の水彩絵の具とパステル。黄、青、朱、紫、黄緑の色鮮やかなチューブが並ぶその隣で、陶器製の絵皿には、泥土のような色が残っている。この色で思い出るのは、少年時代の作文に関する清張の文章である。

あるとき、「雪」という題が出た。ちょうど、その朝、登校の途中に雪が降つていて、上を見ると、灰色の雲を背景に、舞落る雪が黒ずんだものになっている。それが、家や、山などの背景になると、白く変る。

私は「空から灰色の雪が降っていた」と書いた。

(点綴)――(回想的自叙伝)

「先生」はこの後、「雪は白いものと決っている」と叱るのだが、ありのままに多彩な現実を見ていたのは清張少年の方だったろう。

この優れた「目」を携えて、清張は右版画工を経て、朝日新聞社の広告部意匠係へと転身する。しかし、

デパートや映画館の広告図案の仕事は、〈概して退屈〉なものだった。朝に出版社して空いた机を借り、持参した鳥口などの道具やポスターカラーで原稿通りに描くだけの仕事で、〈そこには自分の独創を試みる余地もなければ工夫もなかつた〉と清張は回想する。



絵皿に残された絵の具で、清張は何を描こうとしていたのだろうか。ケッチは、〈仕事〉や〈生活〉から解放されたためか、深みのある温かな色合いをしている。

(学芸担当 池上 貴子)

茶になつた」というエピソードもある。「回想的自叙伝」の「絵具」という章で、清張は仕事やアルバイトで作家となつた後に描いた絵葉書や

父の故郷である矢戸の雪景色のスケッチは、〈仕事〉や〈生活〉から解放されたためか、深みのある温かな色合いをしている。

家族を養つた。色が乾く僅かな間に居眠りしてしまい、寝返りを打つた拍子にせっかく塗つた絵が滅茶滅

茶になつた」というエピソードもある。「回想的自叙伝」の「絵具」といって、清張は仕事やアルバイトで自分の中の心の通うものは何もなかつた」と記した。しかし

そして戦後、懸賞金目当てのポスター書きから商店街のショーウィンドーの飾りつけまでをアルバイトにして、食料野草を贋写し、水彩絵の具で彩色して配布するよう指示した。そして戦後、懸賞金目当てのポスター書きから商店街のショーウィンドー

友の会活動報告

●他都市文学館見学会

(11月2日(金)~3日(土):参加者 16名)



今回は他都市文学館の見学会と文

学散歩もかね、津和野・山口方面へ。津和野では森鷗外記念館の見学と散策。山口では、今年生誕100年を迎えた中原中也記念館の見学、そして仙崎まで足を伸ばし金子みすゞ記念館へ。各館では丁寧な解説を聞きながらゆっくりと見学し、夜は会員さん同士での意見交換でおおいに盛り上がりました。

参加者は少なかったものの、色づきはじめた紅葉の綺麗な景色と美味しいお土産もたくさん買い込み(笑)大満足の見学会になったようです。

●平成19年度年次総会(8月3日(金):参加者 43名)

松本清張記念館地下企画展示室で、平成19年度年次総会を行いました。平成18年度事業及び決算報告、平成19年度事業計画や予算案などの審議の後、開館10周年・生誕100年での友の会事業案などを提案しました。

●清張サロン

(11月28日(水):参加者 21名)



今年度1回目のサロンはテーマを『点と線』、講師を安間隆次先生にお願いしました。

先に放映されたテレビドラマの感想を交えながらの講義、そして参加者からは点と線が発表された当時の思い出などを含め質問や意見が活発に出され、あっという間の2時間になりました。

友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で3,000円となっております。

■友の会事業

- ・講演会、シンポジウム等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・読書会、文芸講座等の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施
- など

■会員特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・記念館主催事業のご案内・参加
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈

- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

研究誌 松本清張研究

第九号(予告)

第九号の特集は「世界への視座」です。清張作品には海外を舞台にしたものが数多くありますが、いずれも綿密な海外取材に基づいて構想・創作されました。各分野の第一線でご活躍の研究者に、清張が取り組んだ事件・テーマの本質や背景を論じていただきました。かつての担当編集者が紹介する海外取材の様子などを加え、充実した内容となっています。ご期待ください。

執筆・談話者は以下のとおりです。(五十音順 敬称略)

- ・浅井泰範 ・綾目広治 ・猪口 孝 ・大村彦次郎 ・郷原 宏
- ・酒井啓子 ・佐野眞一 ・高任和夫 ・玉田芳史 ・辻井 喬
- ・堤 伸輔 ・馬場康雄 ・藤本裕子 ・道川文夫 ・宮田毬栄
- ・山内昌之 ・山田有策

大切なお知らせ

松本清張記念館「友の会」は、松本清張作品の愛好者や関心を持つ人たちが広く交流し、松本清張とその作品及び記念館についての理解を深めていくことを目的として設立されました。このところ「友の会」を、最近募金活動等行っている「清張の会」と取り違える方がいらっしゃいます。「友の会」とは全く関係がないことをお知らせいたします。

●編集後記●

テレビ朝日開局50周年記念ドラマ「松本清張 点と線」(11月25日放送分)が文化庁芸術大賞を受賞しました。清張作品が選ばれたことはとても誇らしいことです。今後とも清張作品が愛されていくとうれしいですね。製紙業界の事情で今号から紙質が変わりますが、館報も今後とも愛されていくよう努力していきます。

(碇 政幸)



編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

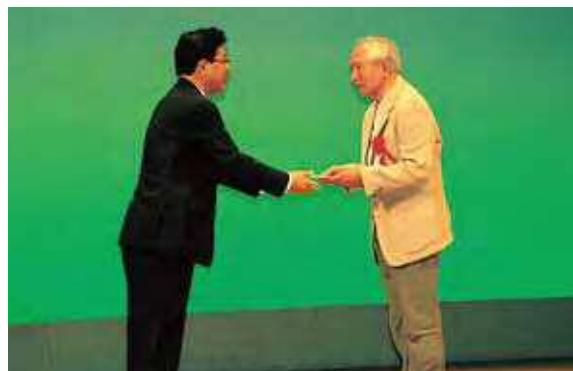
- 開館時間 午前9:30~午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日~12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第9回

松本清張研究奨励事業 奨励金贈呈式

平成19年8月3日、第9回松本清張研究奨励事業奨励金贈呈式が行われ、入選者の網屋喜行(鹿児島県立短期大学名誉教授)さんに奨励金40万円が贈られました。入選企画は、「象徴の設計」と「2・26事件」における「上官命令への絶対服従制度」に関する考察です。



第10回

松本清張研究 奨励事業募集

募集要項



- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成20年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

